

## 平成27年度兵庫県景気動向懇話会結果について

- 1 日時 平成28年2月16日（火）13:30～15:30
- 2 場所 兵庫県民会館1202号室
- 3 出席者 アドバイザリースタッフ 石川 誠嗣（日本銀行神戸支店営業課長）  
小沢 康英（神戸女子大学文学部准教授）  
尾下 優子（神戸大学大学院海事科学研究科講師）  
豊原 法彦（関西学院大学経済学部教授）  
丸山 佐和子（神戸大学大学院経済学研究科准教授）

※五十音順

事務局 企画県民部ビジョン局長

企画県民部統計課

課長外 5名

産業労働部政策労働局産業政策課

1名

### 4 議事

#### (1) 第15循環の景気基準日付の確定について

##### 【主旨・結論】

兵庫県では、景気動向指数をもとに各景気循環における経済活動の比較のために、主要な経済指標の中心的な転換点である景気基準日付を設定している。

兵庫県における第15循環の景気の山・谷については既に暫定設定しているところであるが、全国の第15循環の景気の山・谷が確定したことや、直近のデータを用いて改めて算出したヒストリカルD Iの結果等を踏まえ、今般、景気の山・谷の時期を確定させることについて事務局案を提示した。

これにつき、内閣府の景気動向指数研究会と同様の判断基準に基づき、景気拡大（後退）の波及度、量的な変化及び期間について検証し、さらには四半期別兵庫県内GDP、日銀短観や兵庫県鉱工業指数との整合性を確認した結果、概ね妥当であるとの意見をアドバイザー・スタッフからいただいたので、以下の事務局案のとおり確定する。

	暫定	確定後
第15循環の景気の山	平成23（2011）年5月	平成23（2011）年2月
第15循環の景気の谷	平成25（2013）年2月	平成25（2013）年2月

##### 【主な意見】

- 過去の循環をみても全国に先行して景気の山が来る傾向が見受けられる。今回も同様となっており、その点からも違和感を感じない。提示案で適切だと考える。
- 景気後退局面において拡張局面より高いC I値をつけている点や、やや踊り場的に見受けられる点は気になるものの、様々な側面から基本的な考え方に基づいて検証した結果を見れ

ば提示案で妥当と思われる。

ただ、個別指標の動きで、景気との連動性の説明が難しいものもある。大口電力消費量や有効求人倍率がやや景気の実態から乖離しているように思われる。東日本大震災後は電力の位置づけが変化しており、景気がよくなれば電気を消費するという動きではなくなっているかもしれない。

- ・ 一致指数を構成する個別指標の中で、鉱工業指数はウェイトが大きく、景気の転換点にも一定の影響があるように思う。その観点からいえば、平成 25（2013）年 4 月も景気の谷の候補と考えられるが、様々な側面から検証した結果を踏まえ事務局案を尊重する。
- ・ 事務局案で妥当だと考える。個別指標については今後検討が必要かと思う。大口電力消費量は、東日本震災後の国内電力情勢の変化や電力自由化の影響を勘案して妥当性を検討すべきである。有効求人倍率は雇用のミスマッチが考慮されていない。今後は、業種を限定するなど何らかの条件をつけないと全体では上がり続けてしまうのではないか。
- ・ 事務局案で妥当だと考える。個別指標については経済の構造変化を踏まえながら情勢に見合ったものを適宜取り入れていくようにすべきだと考える。

## （2）兵庫県版 C L I の公開と活用

### 【主旨】

C L I（Composite Leading Indicators）とは、O E C D が作成している景気循環を表す指数で、C L I の変動は景気循環に先行するという特徴があり、景気の短期変動での定性分析に用いられる。

兵庫県で採用されている先行指数の個別指標を用いて試作した C L I では、兵庫 C I 一致指数に先行する動きが見られた。更なる精度向上を図り、景気指標が作成されていない地域での先行性も見通せるようになれば有効性が高まると考えている。

### 【主な意見】

- ・ 算出方法は C I と同じか。
- 外れ値処理や季節調整の方法は O E C D が決めた基準に基づいている。
- ・ どのような個別指標を用いるのがよいのか。
- 地域の実態に応じて手探りで検討していくしかない。産業構造が地域によって異なるので一つの指標がどの地域でも有効とは限らない。例えば兵庫県で有効な指標でも、奈良県や和歌山県で適切な結果が出るとは限らない。地域ごとにチューニングが必要である。
- 地域比較という観点からは、できるだけ同じ基準で比べたいが、地域の正しい実情を知るには採用する指標がまちまちで当然ともいえる。